# 東日本大震災から 16 ケ月経た今、改めて問う
# その前・その時・その後の災害看護の役割と責務

（臼井知津、日本災害看護学会誌 15: 2-11, 2013）

2014 年 6 月 20 日、災害医学抄読会 http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/

2012 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災での災害看護を考えるうえで、これまでに日本が経験がしてきた災害について触れる。その後、東日本大震災を経験して見出した看護の課題について 4 点述べる。

## ■１．地震について

(ア) 大都市部と過疎・離島地域との違い

大都市部で発生した地震は高齢者や障害者などの社会的弱者が孤立しやすい。また各人のつながりが疎であることがしばしばあるため、安心して立ち寄ることができる拠り所や避難所の根本的な検討が必要である。一方で過疎地域・離島地域では、各人のつながりが強く災害に対して協調して「組」として対応することができる。しかし、中長期的には共倒れを生みやすいので注意が必要である。

(イ) 病院施設ごとの避難と対応（特に中小規模の病院施設について）

中小規模の病院では行政等からの支援は届きにくい。そのため避難の際には地域住民による協力が重要となる。日頃から地域との連携には留意を要する。

(ウ) 30 年間の備えをもつ地域におきた地震（駿河湾沖地震）

静岡県は東海地震に対して約 30 年間にわたって備えを行ってきた。2009 年に駿河湾沖地震がおこったとき、避難マニュアルの漏れ、焦り、被災者の自主性など想定外の問題が表出した。同時に備えの必要性と重要性が改めて認識された。

## ■２．台風・豪雨災害について

(ア) 伊勢湾台風（1959 年）、東海豪雨（2000 年）などを経て

日本は死者 4,700 人に及ぶ伊勢湾台風、都市水害の事情を浮き彫りにした東海豪雨などを経験している。近年、これまでにない記録的な豪雨が各地で散見されることを考慮すると、先の災害を参考にして暴風・水害に対する看護体制の確立が全国的に急がれる。

■３．竜巻災害

(ア)　佐賀の F2 竜巻（2004 年）と北海道の F3（2006 年）などを経て

日本は竜巻被害の比較的少ない国である。しかし、竜巻の発生頻度が増加している昨今、竜巻への備え、対応も緊急の課題である（F2：風速 70m/s 以下　F3：風速 92 m/s 以下)。

■４．豪雪災害

(ア)　平成 18 年豪雪を経て

豪雪による人的被害の傾向を示すキーワードは、「雪下ろし」、「高齢者」であった。豪雪地域と高齢化地域はほぼ一致しており、体力が必要な作業に高齢者が従事せざるを得ない状況が被害を大きくしたことが考えられる。高齢社会の現状を視野に入れた新たな支援体制の仕組みの検討が課題である。

■５．「東日本大震災」について

(ア)　看護職の課題とは

①被災者の近くに寄り添う看護職は 3.11 の被災地から目を離さず、これまでの災害看護経験にもとづいて各種情報を結集してそれらの検討を行うことが最重要である。

②上述したように災害看護の対応や方策、特に避難所の問題は急務であり、先進国に許される程度の問題ではない。

③過疎化・高齢社会を見据えて災害の「その前・その時・その後の看護」の検討をすすめることが急務である。保険・医療・福祉・暮らしを総括できるような「看護アセスメント力、および提供システムの開発」を緊急に立案しなければならない。

④最重要な課題の研究とスキルアップ・教育を行う必要がある。被災地の実践活動等の貴重なデータを収集・保管する機関を常時設置する必要があり、その実現を看護界が目指すべきである。また、被災者の基本的ニーズに「看護」として何をするべきか、何ができるのかを「備え」「その時」「その後の長期ケア」に分類し、それぞれに課題を見出し解析研究を行うことは重要な課題である。